

## I 蚕糸業関連資料—前近代—蠶書

### 1. 蠶書（さんしょ）とは

- ① 蚕糸に関する著作ないしは刊行物が蠶書である。ただし、一般農書で内容の一部として蚕糸を取り上げているものは除外
- ②江戸時代の蠶書として100種ほどがあげられ、明治時代に入ると、日本国内での蚕糸業が拡大の一途をたどり、数多くの蠶書が発行される。明治以降に発行された蠶書は1000種類を優に超えている。
- ③内容的には、栽桑、蚕種、飼育、上簇、収繭、製糸等の技術書だけでなく、経営、奨励のための教諭的内容、さらには歴史、由来、伝説に至るまで幅広い書籍が出版されている。

### 2. 江戸時代の蠶書：何を目的に作られたのか？

- ① 公（藩）が殖産奨励を目的として作成したあるいはさせたもの。例えば、日本最初の蠶書のひとつ「蠶育養法記」等は養蚕農家のための教材本と云える。
- ②蚕種製造者あるいは蚕種商の著述による蠶書がある。蠶書の中では最も種類が多い。蚕種を販売するときに技術書を併せて販売、あるいは提供した。
- ③変わった形のものとして絵本がある。「繪本寶能縷（エホンタカラノイトスジ）」。
- ④明治時代になると蠶書の販売対象が広がり、養蚕農家向けだけでなく養蚕技術者向け、蚕糸研究者向け、蚕糸を学ぶ学生向け（教科書）、一般人向け等に分かれてくるのが特徴。

### 3. 江戸時代を代表する蠶書「養蚕秘録」

- ①上垣守國が著した「養蠶秘録」は、江戸時代を代表する蠶書。
- ②本邦の科学書として、外国語（フランス語およびイタリア語）に翻訳・発行された初めての書籍であり、我が国科学技術輸出の第1号とされている。

### 4. 「養蠶秘録」にみる蚕糸に関する知見の普及力

江戸時代の蠶書は一体どのくらいの数を発行されたのだろうか？ 養蠶秘録は装本の種類が多く、3000をはるかに上回ったと想像され、江戸時代の書籍の大ベストセラーである。

## II-1 蚕糸業関連資料—近代—

### 1. イタリアの蚕の掛図

今回のシンポジウムのきっかけとなったイタリアから渡来した教育掛図については、京都工芸繊維大学学術報告書第13巻に詳しく記載しているので、参照していただきたい。

### 2. 京都工芸繊維大学の教育掛図資料

- ①京都工芸繊維大学にはその他、神苑會編輯「養蠶圖解」等がある。内容は、養蚕に関する知識と技術を習得させることを目的、つまり教育用資材として作成され、本学で活用されていたと考えてよい。
- ②蚕糸に関わる生産統計（世界各国生糸生産額比較、本邦生糸等輸出、繭の色別生産量、熨斗糸玉糸屑糸統計等々）が多く所蔵されているのも特徴。

### 3. その他の教育用資材

教育掛図、蠶書、浮世絵等と共に、標本類も重要な教育用資材である。しかしながら、時代の変化、社会情勢の変化等に伴い、廃棄あるいはしまい込まれたままになっている場合が多い。

## III 最後に

大学が保有する蚕糸に関わる教育資材である掛図、蠶書は、大学にとって貴重な財産であり、大学の「知」の根源の一つである。また、標本類も大学の「知」にとって貴重な資料であることに変わりはなく、今後の調査が待たれる課題と考えている。